基調講演

「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

東北芸術工科大学教授
藤原（ふじわら）　徹（とおる）

皆さん、こんにちは。今朝、東北から出てきました。とてもいい天気で、さすがに名古屋に来ますと温かいと。私は普段は山形にいるんですが、既に二日前から十五センチくらい雪が降りまして、また寒い季節がやってくるんだなという感じでおります。

今日は私が震災で経験しましたこと、見ましたことをお話させていただいて、少しでも皆さんのお役に立てればと思います。全国から本当に信じられないほどの支援をいただいて、何とか東北地方は持ちこたえております。そういうことで感謝の気持ちをこめて、発表させていただきたいと思います。

まず時間の許す限り、震災当日の様子、それから震災後の私たちのとった行動を大まかにお話します。日本列島は十年と待たずして大地震が起こっており、何度か既に救援に行っておりましたので、そういった経験がどう役立ったかということもお話したいと思います。

「入院していただいている」って私たちはよく言うんですけれど、作品を現在、大学の方にお預かりして、状況・状態をじっと観察し、記録しております。そして名古屋に住んでいらっしゃる皆様方にもご支援を頂きました。今後どういう風に心構えというか、どういうものを準備したらいいか少しでも参考になればと思っております。

これは（スライド表示）、宮城県美術館、県立の美術館ですが、ここの前にあります、およそ四メートルくらい、ヘンリー・ムーアというイギリスの彫刻家の「スピンドル・ピース」というブロンズ像です。この像の修復をしてほしいという依頼を受けておりましたので、受託事業として、作品の周りに、ビルで使う足場を組んでいただいて、当日、その中で学生四、五人と作業しておりました。うちの学校はなるべく学生に現場を体験させるということで絶えずいろいろなところに連れて行っております。

紙とか洋画の修復とは違いまして、立体物の修復は構造との葛藤でございます。この日も気温は零度前後だったので、防寒着を着てやって

基調講演

「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

おりました。そして二時四十分ぐらいでしたか、横揺れがまず最初に来ました。横にゆさゆさゆさっと揺れてきておりました。学生も私も足場に乗っておりましたので、「あ、地震だね」と言って、ただいつもよりもちょっと大きいけれども、震度五ぐらいかなと思いました。宮城県は一九八五年にもすごく大きな地震がありましたが、今回も其のくらいかなと。そのうちこれはきついなという感じで見ておりました。すると、遠くの方からですね、ごおっていう音がして、地鳴りがしてきたんですね。それが迫ってくるのがわかりました、野外でしたので。

ごおっていうのが自分に近づいてきた時に、上下振動の地震に変わりました。まず横揺れでぐらぐらぐらと来て、みんな足場に掴まっていましたけれど、その次はどーんという突き上げられるような揺れがしました。来たんだからいつか止まるだろうと思い、学生にはとにかく動くなと、足場はわりと柔軟性を持っておりまして、組んだ形が正方形でしたので倒れることはないだろうと思いまして、動くなって声をかけました。

ただ、この彫刻は四トン近い作品ですが、左右に二十センチくらいずっと揺れておりました。やあすごいなあと思いましたね。これくらいの大きさのものが。倒れてくれなければいいなという気持ちでした。(先程の写真ですけれども、これはコーティングの作業をちょっとしておりまして、小雪が降ってましたね。)

ということで美術館は閉館するということになり、作業をやめて帰りましょうと言って、車に乗って、美術館を出たわけです。仙台の宮城県立美術館に学生を連れて山形から来ておりましたので、仙台から山形に帰ろうと高速に乗ろうと思いました。

街中は渋滞で車は一切動けない状態でした。私達は屋外にいたので、津波が来て、こんな地震が来たということは実はわからない状態だったのです。ですから「周りの様子が何か変だね」、「何か子どもが防空頭巾かぶっているよ、先生」とか言うので、何で防空頭巾をかぶっているんだろうと思いました。もう津波が来た後だったのですが、私には情報が入っておりませんでした。作業をやめて車で町中に向かいましたが、もう渋滞で車が動いてないということで、裏道を通って山を越えて山形に帰りました。

道すがらまだ町の中心の方向に向かっている人はなぜか多かったのですが、反対に出て行く人は少なかったです。ということで比較的スムーズに峠を越えて山形に帰りました。ただちょっといつもと違っていたのは、山形の町も真っ暗だったことです。初めて見たような風景で、全然電気がついていませんでした。何が起こっているのだろうとじわじわと不安になりました。

学生の一人がワンセグでテレビ中継を見せてくれまして、画像はあまりよくなかったですけど、そこでやっと津波が来てもう三陸海岸は壊滅状態だと知りました。大変なことが起こっていることがわかりました。電気も一切ついていません。そういうことで学生達には誰かの下宿に集まってとにかく一人にならないようにと伝えて、私は単身赴任なので、山形に一人でおりました。

キャンプ用のラジオとランプがありましたので、それをすぐに出して、真っ暗な中で灯火のように灯して一晩過ごしました。寒さがすごく厳しかったので、登山用の寝袋に入って、さらにその格好のまま布団の中に入って、じっとラジオを聞きながら朝を迎えました。どんどん頭の中に悪い状況が浮かんでくるわけですね。どうなるんだろうという感じでした。

翌日はもう完全に皆の動きが止まっていまして、そのうちニュースで、食料の買いあさりとかが東京で起こっていることを知りました。山

形はさほどでもなかったんですが、ストアに並ぶ人が増えてきていました。

　このまま街中に出ると、非常に自分の良心に反することを自分がやってしまいそうで、そんな弱い自分を知っていましたので、あるだけの食料でどこまで行けるか、とりあえずあまりバタバタするのはやめようということで、家におりました。持っている食料が三日間の食料だなと。これで一日一食にすれば一週間いけるという変な計算をしまして、ずっと家におりました。

　二日目の夜は、昨日のような夜の寒さは耐えられないと思っていました。さすがに北国は寒さという恐怖心がありますが、運悪く暖房はファンヒーターというやつで、電気がないと付けられない。仕方なく布団の中でずっとラジオを聞いていると、あんまりいいことは考えない、どんどん悪い方向に物事を考えていく。

　もう耐えられないと思っていた時に、一番最初に通ったのが電気です。六時、たしか十分か十五分、今でも覚えています。バンと電気がついたんですね。冷蔵庫なんかの音がして、助かったっていう、何ていうでしょうかね、本当に心の灯火を得たように明かりがついて、やっとテレビも見られました。これで情報と暖がとれました。名古屋はどのくらい冷えるかわかりませんが北国の場合は暖房がないと凍死しそうなので、一番怖いです。

　次に起こったのが、テレビの報道で知った、ガソリンが無いということでした。もちろん私の車も半分ぐらいしかガソリンが入っておりませんでした。一週間越えたら、食料探しに行かないといけないのに、その燃料を頭の中で計算すると、それが出来ないというような状況でした。

　それからニュースが入ってきまして、福島の原発が水素爆発したと。私の家の方に福島の方向から風が吹いておりまして、雲がですね、真っ黒い雲がずっと迫ってきたのを覚えているんです。あれはどういう雲か未だによくわからないんですが、精神的にどんどん追い込まれていきました。

　戦争を私は経験してませんけれど、された方はそういうことをご存じだと思いますが、その中で自分をまずどう持ちこたえさせるかというのが震災の一番難しいことだと思います。割とうちの学生はあっけらかんとして、みんなで一週間過ごしたようですけど、大人の方が意外に弱いかもしれません。

　ということで、一番大事なことはやはり身の安全確保です。昨日も、消防団の方が任務の遂行のために亡くなったのはおかしいんじゃないかという番組がありましたけれども。自らの意思でやっているのであればいい、僕は立派なことだと思うんですけれど、強制されてということがよくあるということは問題なんだろうなと思いました。危ないと思ったらやっぱり逃げていいと思います、私は。

　次に生活の確保ですね。生活が確保されないと、人間は本当に不安になりまして、人間であることをキープすることというか、維持することがとっても難しくなります。最小限のエネルギーで人間であることを確保することを考えられたらいいような気が致しました。

　そしてやっと次に、自分が一体何ができるかということですね。

　やっとテレビが一日半で付くようになって、印象的でしたのが、その時にテレビで、皆さんも見ていていらしたと思うんですが、ずっと同じＣＭが何度も何度も流れていましたね。これは後日ＮＨＫの方に聞きましたら、九州でＣＭのコンクールに参加していた作品を急遽使ったそうです。すごいことをやるんだなと思いました。耳に今でもこびりついております。

　ただし、半年が過ぎて思い返して

基調講演

「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

みますと、やっぱりパニックにならなかったのは、あなたは「人間だよ」と念仏のようにCMが流していたからかもしれません。人間はやっぱり弱い生き物ですから、そういう意味であれはけっして悪くはなかったなと今は感じています。

一ヶ月経ってやっとですね、（ボランティアというのはあまり好きな言葉ではないんですが）、とにかく何かしたいという学生がいっぱいいました。うちの学校からもバスをチャーターして泥をかくとか、そういうのに行っております。私達ができることは文化財の保護なので、まず文化財をどう救出するかということを考えました。

最初の一ヶ月半の工程なんですが、一週目は本当に動けませんでした。かなり精神的にダメージを受けました。やっと二週目、三週目になって、年度末の仕事をしました。三月三十一日までに仕上げないといけない仕事がありまして、泣き泣きそれをやっておりました。四週目、大学に文化財保存修復研究センターがありますから、ありとあらゆる壊れたものの救済の電話が入ってくるようになりました。

これはその前の新潟地震の時に経験したことなんですが、うちの学校の若い生徒は使命感に燃えて、救済道具を自分の車の中に突っ込んで、震災のあった二日、三日後に飛び出して行って、俺は絶対に何かを救ってくるっていう感じで行ったんですね。でも、現場で突っ返されて帰ってきたという経験を持っておりまして、闇雲に行くっていうことは気持ちとしては非常にわかるんだけれど、現場を混乱させてしまうので、考えないという経験をしました。

救援が入り始めた時に、間違いなく文化財が運び込まれてくると思いましたので、まずそれらの場所の確保をしました。大学の中でどのぐらい受け入れられて、どういうことができるかということを考え始めておりました。会議をして、どこまで直すことを条件に引き受けるかを話し合いました。稀に家を流されたから家を建て直してくれというような人がいるわけなんですね。そうではなくて、いわゆる土やヘドロをとって、何とかまた住めるように、何とか更地のような状態にまではもっていきましょうと。そこに頑張ってうちを建てるのはあなたたちがやることだと。

修復もですね、傷んで届くと、これをきれいにして、新品のようにして戻してもらえるんじゃないかと勘違いされる方が直して下さいと来るんです。その場合、洗浄してこの状態で一年二年置いても大丈夫というところまで戻すというところで一つ線を引いておきましょう、という話し合いをしました。

ということで、五週目にそういう会議をして、約六週目からやっと本格的な行動を開始しました。それでまず南三陸の西光寺という天台宗のお寺さんが完全に破壊されまして、そこにありました仏像とか仏具、そういうものをどうしたらいいかわからないという知らせが入りました。うちの文化財保存修復センターの人間が六人入りましたけど、ここはまだ組織的な救済の知らせが入っていない個人のお寺さんでした。そこに行く途中、南三陸に近くなってきた谷合に入りますと、そこには津波が最後の残骸を運んできてしまっていて、一番奥にものすごい量の残骸というか漂流物がありました。

もう既に四月の七日ですから、一ヶ月経っているかいないか、震災から四週目の初めぐらいですね。道路だけはすでに確保されておりました。入江の一番奥の方は海水が全部引き切らないで、水溜りのようになっていました。船も流されていますし、こういう状態でした（スライド提示）。

これは鉄道の陸橋のようなものですが、両サイドは完全に崩壊し

て、不思議なオブジェのようになって立っている。皆さんはよく見ていらっしゃると思うんですが、こういう四階建ての、これ南三陸のすぐそばにある共同住宅ですが、この高さまで津波が来るということです。非常に無残で、あまり言いたくないんですが、重い気持ちに毎回なって帰ってきておりました。

阪神大震災の時は私はちょうど日本にいなかったんですが、外国のテレビを見ていまして、知り合いが「おい、日本が沈没したぞ」と飛び込んで来まして、画像を見て、「日本沈没したぞ」と言われた時には、画像とその言葉で本当に沈没したのかと思いました。

皆さんはこういう画像ばかり見ていらっしゃるので、悲惨なんですが、海岸線の約一、二キロ奥はですね、平然とそのままなんです。「平然と」とは言いますが、地震がありましたから、多少壊れていますが、生活できる状況です。そういう風景の違いというか入江のところをずっと越えて、峠をいくつも越えて行くと、少し高くなったところは普通の風景が残っていて、ちょっと下るとまた異様な世界が広がる、というこの繰り返しなのです。水門も全く駄目でした。ぐにゃぐにゃになっておりました。すごい海水のエネルギーです。

これが救済に行った現場です（スライド提示）。ここにお寺があったんですが、完全に崩壊しておりました。これは裏にあった母屋みたいな作業場です。四週目の終わりぐらいでしたか、行きました時に、一生懸命檀家の皆さんと住職の方が、この中から見つけたものをここにたくさん並べて天日干ししていました。かなり書物を持っていらした方で、それらを天日干しされていました。これは昔の亡くなった方を運ぶ、つまり霊柩車のように棺を入れてみんなが担ぐものですね。

ここが畑だったみたいで、そこにいろんな戸板を引いてそこに載せました。瓦礫の中から物を探すのは本当に至難の業で、この辺からも見つかるし、この辺からも見つかるというようにおっしゃっていました。

災害が起きた時に一番注意しなければいけないことというか、困ることは、片づけをする時に大事な物かどうか区別できないで処分してしまうことです。これは当たり前のことで、しょうがないことです。そんなこと言っていたら人間の命が持ちません。精神的にも多分持たないでしょう。

この現場で何ができるかというとで、先程の写真のちょっと高いところで、温室プレハブの骨を使い、一時保管庫を作りました。ここにとにかくブルーシートをかけて、その中を地面より少し高くして、どんどん運び込みました。まだ気温も相当低かったんで、カビの発生は割と大丈夫でしたが一週間後に行ったら若干生えていたのがありましたけど、まだ大丈夫だろうと。夏前までに何とか、梅雨前までに何とかしないと、大変なことになると話をしながら帰ってきました。

一週間後に行った時に、再度近所の方とみんなでその場所を見たのですが、重機が相当たくさん入っていましたので、この中から文化財を探すのはちょっと難しいなという状況でした。

ありがたいことに、機動隊の方も自衛隊の方もものすごい数が入って来て下さっていて、復旧作業をやっておられました。被災した方も、みな暗くなってないで、笑い飛ばしてもう前を向くしかないねって。東北の人は強いなあと本当に思いました。

これが陸前高田という岩手県のちょうど真ん中あたりの海沿いにある博物館です（スライド提示）。陸前高田市博物館です。これを見られると、津波がどのくらいパワーをもっているか、おわかりになると思いますが、どーんと入り口をぶち抜かれて、何にもありません。

基調講演

「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

これは私の大好きな柳原義達先生の彫刻です（スライド提示）。

これは正面玄関の石の上に設置されていたんですが、ブロンズでできた等身大像です。漂流物が当たってものすごいダメージを受けておりました。腿の辺りと脛の辺りです。ブロンズがこれだけへこむということは、とんでもないことなんです。足首も折れております。

これは四月の初旬に救済に入った時だと思いますが、絵画とかそういうものが立て掛けかれていて、まだ濡れております（スライド提示）。湿っております。

大学としては、文科省から要請依頼があるまで行動するのは我慢しようということになりました。個人的な救済はいくつかしましたけれども、国公立の美術館・博物館はみんなの財産ということで、ややこしい書類上の問題がありまして、勝手に簡単に救済に行くことはできませんでした。それは本当にまどろっこしいというかイライラする事ですが、そこをぐっと抑えて、文科省からの援助依頼があるまでは取り敢えず準備だけして動くのはやめようと決めておりました。

それで当然というか案の定というか文科省から依頼が来ました。第一の救済隊が石巻文化センター等に入りました。港のそばにありまして、ひどい状態でした。そこは毛利コレクションや地元作家高橋英吉の多くの作品、歴史資料と美術品を持っています。

面白いことに史料と美術品の救済の仕方が若干違うんですね。史料の場合は書いてあることや内容を大事に保全することと、もちろん材料技法なんかも大事なものがいっぱいありますが、美術品になるとまた違い、美学、美術史的な要素も考えなくてはなりません。

現代アートになると、一般の方は瓦礫か作品かさっぱりわかりません。本当にわかりません。後程お見せしますけれども。現代アートはなんでもありの材料ですから、本当に。しかも廃材、捨てたもので作品を作ってらっしゃる方も大勢いるので。

ということで依頼を受けまして、まず第一現場、戦争で言うと前線ですね。石巻文化センターというのはまさしく河口の前線なんです。そこで、負傷兵じゃないですけれど、傷んだ文化財を移動します。まず課題となったのは、どこに移動させるかということでした。宮城県美術館、これは私が先程のヘンリー・ムーアの彫刻の修復をやっていた所ですけれど、今回は良かった面として、あそこの倉庫のスペースが少し空いていました。

美術館の中に入れるわけにはいかないんですね。なぜかというと、まず汚れもあるんですけれど、どういうカビや害虫を持っているかわかりませんし、そういうものを美術館の中に入れるとほかのものに移ってしまうので、負傷兵はすぐに応接間（美術館内）には通せないんです。

ということでそこの倉庫が空いているということで何とか話をつけてもらって、じゃあまず石巻文化センターから宮城県美術館に移動させようとしました。第一番に入ったのは、学芸員の方が中心でしたが、若干のコンサバター（注―保存修復家）もおりました。作品リストを見ながら、おおよその泥と汚れを取り除いて全

てのものにまずナンバーをつけて写真を撮っていました。さすが学芸員の人だなあと感じるんですが、どんな小さな破片でも美術品だと思われるものにはナンバーをつけてどんどん宮城県美術館に送ってきて下さいました。

その間に仙台市博物館に救援委員会という現地本部が設置されました。実際問題としては、全体が見えていなくて、私達は一体どうなるかわかりませんでした。どういう系統で動けばいいのか、あっちも動いてる、こっちも動いているという、そういう不安があったんです。

これは石巻で出てきた桂ゆきさんの作品です。これは一回目に泥を少し取った状態です。

石巻文化センターは製紙工場のすぐ横にありまして、今回の被災で一番問題になったというか、大変な思いをしたのは、そこにあったパルプの原料が全部溶け出して流れて石巻文化センターの建物の中に入り込んできたことです。悪いことに作品に付着したパルプの上にカビがどんどん生えてきました。パルプの上にちょうどカビの畑を作ったように、むしろ材料よりもパルプの上にカビが生えてきておりました。

良かった面は後からわかったことですが、海水だったので、思ったほどバクテリアやカビが繁茂しなかったことです。これは私達が受け入れる時からものすごく心配だったことですが、現在のところも比較的安定しています。パルプが食いつくと、本当にトイレットペーパーがべたっとくっついたようで、なかなか取れません。

これも作品です。ちょっと一部分解しましたが、鈴木実という人の作品です。

全国美術館会議という美術館を中心とした組織があり、そこがまず阪神淡路大震災の時に非常に頑張って兵庫県立近代美術館を救出に行ったんですね。その時から、私も行った高知大水害とかですね、割と経験を積んで何度も被災地に以前から行っておりました。ＣＷＧといいますけれど、コンサベーション・ワーキング・グループというのを全国美術館会議の中に作っていただいて、少し予算を頂いてどういうことをしたら災害から美術品を守れるかっていうことを度々打ち合わせをしていました。四月の半ば過ぎぐらいから、そのメンバーがまず中心になって動きました。

ここが作業した場所なんです。四月の二十九日に美術館に行きました。作品が来ても、何をどこでどうするかということが全く決まっておりませんでした。この右側にあるのが公用車を入れておく車庫なんですね。公用車を二台出していただいて、そこに空間を作り、裏庭の横の倉庫と併せて、作品をどんどん石巻から運んでいただきました。まだ湿気ておりました。倉庫も実は非常に湿気ているのですが、初めは目をつぶりました。しかも、もうカビが出てしまっているものもありました。あまり狭い部屋で作業をすると人体に影響がある発がん性のカビもあるので、外でやった方がいいだろうということで、駐車場の前で一生懸命やり始めました。

学芸員の方は何が入ってきてどういうふうに出て行ったかという記録、それから本部との連絡、そういう処理能力、分類能力はすごいなと思いました。ただし、材料に関してはやっぱりコンサバターには敵わないというところがあります。それぞれの専門があるならということで、まず油絵は油絵に割と詳しいコンサバター、もしくは修復家のかた、そして和物、軸、屏風、そういうものは日本物のコンサバター、そして立体物は私の方が引き受けることにして、ここの場所の中で、立体物、平面物、平面物の中でも洋物と和物というふうに分けて行いました。

その当時、やっと全体の構造が見

基調講演

「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

えてきました。文化庁が主導で、こういう救済行動の構図が出来上がったということがわかってきました。

私達がいるのはこのあたりです。あまりよく見えなくて申し訳ないですが、被災した文化財。そして大学はここに関わっています。

実際の連絡網は、これが現場の被災本部なんですが、ここから情報を上げていったり、若干わからない処方箋なんかは、東京の国立文化財研究所などが情報を下ろしてきてくれました。

そして、レスキュー隊というのがありますけど、人手が足りなくなりまして、私の大学の研究員や大学院生も動員しました。泥なんかを取ってもらうとか、そういうことをしてもらいました。

この現場でちょっと困ったのは、学芸員の方も自分の仕事を持っていらっしゃることです。だから精々長くて一週間、それ以上いますと、自分の美術館、博物館の業務が滞ってしまうんですね。そういうことでどうしても帰らなくちゃならないということが頻繁に起こりました。

その時に一番困ることは、引継ぎをうまくし、仕事を流れていかすことです。一応、油絵、日本画、彫刻と大きく三つに分けて、それぞれに専門家が入っていました。加えて、建築現場でいうと、人足を手配するなどマネージングをやってくれる方がもう一人つきました。そして一日あったこととか、どういう進行状況かとか、絶えず中央と連絡をとってもらいました。

これは防波堤が崩れている写真です（スライド提示）。

一九九八年に高知県美術館が水害に遭いまして、一階の殆どがダメージを受けました。九五年の阪神淡路大震災でも、兵庫県立近代美術館（注―現在の兵庫県立美術館）のロビーにありました石の彫刻とか、すごい数の彫刻が、あの中を飛び跳ねて歩いたといいます。それで私も何点かを調査に行きましたけど、高知の場合は、作品をとにかく立体物は二階に上げて乾燥させるということでした。今回の震災でも床に接しているところに黒カビが生えてきています。彫刻の場合、ブロンズは大丈夫でしたけど。

ということで、彫刻を若干床から持ち上げるんです。木や簀のようなものがあればいいんですが、小さい彫刻の場合は割り箸なんかでもいいから、とにかくそういうものを使って床から少し上げるだけで作品に入ってくる水分を相当防げます。

あとは高知の場合、新聞社が協力して下さいまして、売れなかった新聞を搬送していただきました。床がまだ湿って少しべとべとな状態でしたので、床に全面に敷いてから、それを取替えるということをやっておりました。

これは新潟中越地震で被災した山形県の掬粋巧芸館という財団法人の美術館です（スライド提示）。ここは李朝の壺や陶磁器を沢山収集しています。大したものです。その中国、朝鮮物の焼き物は随分壊れました。

この写真が載っているのはなぜかと申しますと、前の館長、今出ている方のおじいさんになるんですが、この方が壊れた後があまりにも悲しいということで、骨董の趣味のある方だったので、自分で直したようです。当時使えるものとしては木工用ボンド、俗にいうボンドですね、そういうものでどんどん継いで割れた陶器を直していらしたんですが、それからもう十年、二十年経ちますと、中には接着剤が黄ばんでしまったものもあります。

ここにあるのは孔雀釉のとても珍しい壺なんですが、これが土色に全部変色していました。なんでだろうということで、うちで学生をアシスタントにして、直したところを全部取りました。割れ痕は修正しませんでした。割れていることは見えても、その物自体の美しさ、本来の孔雀釉

の美しさがきちんと出た方がいいということです。

ここに「National Institute of the Conservation of Cultural Property」と書いてありますけれど、国際文化財保存学院です（スライド提示）。そういうところが、もう数年前に「文化財防災ウィール」というものを出しております。美術館・博物館には多分これ行ってると思うんですが。

今回、自分達が受けた震災で、これは有効だった、これは無意味だったねということをもう一度検証するということが次につながってくるような気が致しました。当時は津波と震災を同時並行では考えておりませんで、どちらかというと、火災の方に中心をおいて考えていました。火災と地震というつながりについて、今回は石巻や気仙沼で火災もありましたけれど、火災、地震、津波という複合的なものがやってくることを想定して、ちょっと考え直してみるといいと思います。このウィールには、こちら側にはこういうふうに災害があった時にどうすればいいのかが、裏側には材料によってどういう処置をしたらいいかということが書かれていました。

それから、今回役に立ったので申し上げたいのですが、文化財保存修復学会が平成十八年十一月十一日に東北大と協力して、「東北の文化財を守る」というテーマでシンポジウムをやっておりました。そこで東北大の平川新先生という方が言われたことと、それがどう有効だったかを振り返りました。全てに効果あったわけではなかったんですけれども、その中で悉皆調査をきちんとやっていこうということは有益な提言でした。自分達が一体どんなものを持っているのか、自分の身の回りにある文化財を一日かけて悉皆調査します。今日はじゃああの辺に行こうと言ってさっと行ってざあって調べてその地域は終わるというように、一個ずつ調べます。長期間に、たとえば一週間にわたってずっとやるのじゃなくて、一日で行けるような状態で少しずつつぶしていこうというのです。

この時の悉皆調査の記録のおかげで、まずどこに何があるか目安がつけられました。だから救済する時に非常に役に立ちました。ただし、救済された作品がうちの学校に持ち込まれて、どうしたらいいかわからないようなものはいくつかありましたけど。

日記をちょっと書いていましたけど、四月の七日から動き始めまして、（最近は若干福島に行くことが多くなりましたが。）こういう状態で、大学の授業は休講でしたので、四月は完全に一ヶ月、五月に入っては土日を使って宮城県美術館まで作品の修復処置、維持処置に行っていました。先程申し上げましたように、前線と収監、野戦病院ですね。その後本当の病院に連れて行くという、この工程を踏んだことは比較的にうまく機能したなと思いました。

なぜかと申しますと、前線で繊細な手術はできないですね。それから冷静な気持ちで観察することができない。場所を変えるごとにより処置のレベルを上げていけるんですね。しかも石巻文化センターの現場にいて、作品が今のような割と安静な状態にあるということは考えもつかないですね。その現場、その現場で、少しずつ状態を上げていったということが良かったと思います。これを全部通したら多分精神的にしんどくて、やれなかったかと思います。

これが今美術品が運び込まれている文化財保存修復センターです（スライド提示）。大学の中にあります。一応四階までありまして、一階で考古遺物とか仏像とか大きい物を処理できまして、二階は吹き抜けになっておりまして、収蔵庫が二階にあります。三階に洋画や日本画の分析室があります。

基調講演

「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

構成としては普通の大学病院よりは小さいですけれども、物が入ってきて、かなり危ないなと思うとすぐにX線画像を撮ります。X線とって、カビとか何か膿んでいるところがあると、それを採取して分析室に持って行きます。蛍光回折とかガスコロマトグラフィとか、FTIR、いろんな分析系の機材が揃っていますので、そういうので分析して、どう処理するかという方向に持っていくシステムを作っております。

これは紙本資料ですね（スライド提示）。亘理の農業高校から来た紙資料を学生が一生懸命に修復しています。やれることといったら、まず乾燥させて本と本の隙間にある細かい砂や汚れを、一つ一つ刷毛で取っていきます。四千件以上ありますから、学生の力を借りないとどうにもならなくて、授業の空いた時にこういうふうに来てやってくれています。もちろん地域のボランティアの方も来て下さいまして、毎日毎日夏場はやっておりました。

これは立体物の方です（スライド提示）。学生がまず作品を取り出して、全部写真を取り直して、きちんと状態調査をして、危ない時、つまりカビが相当生えてきている場合は、すぐに殺菌したりして、作業に入っていくんです。

実はこのブルーの座布団は、何とですね、愛知県美術館から送って下さったんです。あそこのボランティアの方が、何とか役に立ちたいと、手縫いでこの座布団を作って大量に送って下さいました。

文化財を学校に持って来ると、裸眼からルーペぐらいまでのレベルで見ていた視力が、四十倍の実体顕微鏡から電子顕微鏡まで、観察するレベルが変わってくるんですね。現場、中間現場で一生懸命ルーペぐらいは使いながらカビとかパルプの付着とかを一生懸命取っていたんですが、それでも学校に帰ってこの顕微鏡で見ますと、普通の視力では見えない、作品の表面に付着したパルプの細かい繊維がこってりついているのが見えます。それをどう取るかということを学生の研究材料にしたりして進行しております。

こういうふうに、各作品に対して一人の学生を、担当医といいますけれど、つけます。責任を持たせるんです。共同ですと誰がどうなっているかわからないので、一人責任者をおいて、何かを決定して動いていく時には、数人で相談して、お薬でいくか、手術するか、そういうことを決めていくシステムです。

これは最近有名になってしまいましたけれど、真空凍結乾燥機です（スライド提示）。フル回転で奥に二台あるので、これを昼夜まわしながら、重要な公文書とかを処理しておりました。

これは分析室です。（スライド提示）。贅沢なことにX線蛍光回析機とか、赤外線、FTIRと申しますけれど、そういう機械や、隣には電子顕微鏡とかがいろいろ揃っております。メンテナンスが結構大変で、こういうところを作りたくても、なかなかお金がかかってしまうというのが現実です。

これは洋画の処置室です（スライド提示）。こういうふうに広げてやっております。こっちは史料の方で、史料物はこういう箱の中に入れています。まだまだいっぱい詰まっております。

こういう機械を揃えることが、私の夢でした。こういう機械を入れて文化財を扱えるところを宮城県で作ってほしいとお願いしたんですね。面白いことに、その時に掛け合ったところが東北電力なんです。一番お金を東北で持っているのが東北電力なんですが、その当時は訳のわからないことに投資できないような顔をされました。文化庁にもお願いに行ったんですが、文化庁も…。お金が結構かかるんです。この機器を維持していくのにやっぱり相当かかっ

てしまうんですね。

今回の震災で良かったことの一つには、たとえば宮城県美術館の場合は、危ないものには全部免震台をきちんと入れ、野外彫刻は載せるだけじゃなくて、必ず台と固定する。だから、先程のヘンリー・ムーアは揺れても台から落っこちないですんだんですね。いくつかの街の野外彫刻は転倒しております。怪我人が出たというのはそんなに聞いていないのですが。平気で石でも飛び跳ねます。兎のようにぴょんぴょん飛び跳ねます。そういう意味で、もし少しでも予算がつくのであれば、確実な固定をすること。それから予算がついた時でいいから、お預かりした作品を展示する時なんかには、地震が来ても大丈夫な免震台を使うことが大切です。

変な話ですけれど、免震台はとっても高いんですね。もう滅茶苦茶な値段がついております。単価の安い、安いという言い方は、芸術にはないんですけど、二十万ぐらいの評価のついた作品を展示するのに、二百万近い値段のする免震台を入れるのは私は何か変だとは思うんです。これはどちらかというと、免震台の値段をどんどん下げてきてくれないといけない。医療の分野でも分析機器がものすごく高くて、その分析機器を維持するために、健康保険のお金をどんどん持ってかれています。もう少しその辺の社会構造を考えて、人間も文化財も、もっと当たり前の感覚で処置できるようになるといいなと思います。

ということで、あまりはっきりした終わり方ができませんでしたが、こういう経験を致しましたので、ご報告致します。

九州国立博物館の免震構造